

コミュニケーション研究会 第5次テーマ「日本の技術を論じる」

『 グローバルな高度技術社会をどう生きる 』

山 本 義 行

平成 25 年 03 月 07 日

平成 25 年 3 月 7 日

コミュニケーション研究会 五次テーマ

「グローバルな高度技術社会をどう生きる」

山本義行

はじめに

日本の再生を真剣に考える元通産官僚の古賀茂明氏によれば、官僚たちは『国民というものは基本的に馬鹿である』という前提で物事を考えていると発言しています。世界的に見ても教育レベルの高い日本の国民を官僚は馬鹿にしているというのです。しかし、これには一理あると思われます。元来、人としていざという時に必要なのは学力、教養程度といった知識のレベルにあるのではなく、自分の目で見て、自分の頭で考えて判断、決断、実行する知恵の力なのではないでしょうか？最近では考え抜くことの出来ない若者が増加していると云われますが、若者どころか、子供から大人まですべての年代で考える力が問われているのではないかという気がします。

人間の価値はその頭の働きの統合性と自律性にあるといえます。人は一度覚えたことを繰り返すことは繰り返しを重ねるごとに簡単に出来るようになります。いわゆる習うよりも慣れろということです。慣れ過ぎるとマンネリ化します。ところが、新たに初めて覚えるとか、過去に経験していないことについて考えたり、行動に移すことは簡単には出来ません。これには時間やエネルギーが必要です。簡単に慣れるわけにもいきません。

米国の 1970 年代のことです。ハーバード大学のマクレランド教授（心理学）は学歴や知能レベルが同等の外交官の業績レベルに大きな差が出るのは何故かということに興味を抱きました。これをきっかけにして始まった様々な研究の結果、いわゆる本当のプロフェッショナルな人材が良好な成果を現実的かつ継続的に出せるのは、ただ知識やスキルが優れているからだけでなく、様々な状況下にあっても、一定の安定したパターンの行動や態度、思考や判断や選択を行うからだということです。つまり、本物は現実の経験を通じて常に、「考えて」、「学んで」いるからこそプロでありエリートなのだというのです。

言い換えると、有能な個人となるには、どんなに素晴らしい潜在的な能力を備えようとも、経験を通じて「考えて」、「学び取る」知恵が無い限りは無理があるというわけです。戦後の日本人はただひたすら働くだけで得られる幸せに浸りすぎて考えることを忘れてきたかのようです。政治にしても、表面的な政策論議ばかりが繰り返され、何度も看板倒れに終わった過去の失敗の経験が全く生かされていません。本当の意味の検証など行われたことがあるのでしょうか？ともかくにも、日本を取り巻く環境のベクトルが大きく方向転換し始めているにもかかわらず、いつまでも本格的な政策転換が出来ないというのはやはり『本物のプロが力を発揮出来る環境にない』からなのでしょう。本論は急速な老齡

化が進む中であってもこのような状況を打破して特に個人としての観点から、グローバル化や技術の高度化の進んだ社会を乗り切るための処方箋を明らかにしようと試みるものがあります。

I. 現代日本社会と統合失調症

本質を捉えない政策論議ばかりの横行

現代の日本社会は人に譬えるなら統合失調症に陥っているのだと思います。個人の持つ社会全体を正確に把握して適切に対応する能力が大きく劣化しています。個々の政策としては部分的にまともなようであっても過去の事実や真実についての裏づけのある反省の上に立たずに、全体的に本質を捉えない表面的論議やとんちんかんな対応ばかりが横行しているように思います。その根本原因は何と言っても思考に論理性に欠いていて曖昧な判断しか出来ない点にあると考えます。思想、信条上の問題で無い限り、物事は問題点さえクリアに出来れば、自ずとその答は明らかになるはずですが。この問題点の突っ込み方が浅い上に論理性が曖昧なばかりに中途半端な対策ばかりが横行するのではないのでしょうか？

小泉改革を振り返ると、当時、既に平行して考慮して対策を打っておくべきことがあったはずですが。反省点は具体的にどこにあるのでしょうか？そもそもグローバルな戦いに挑むことの出来る人材も欠いたままグローバル化して勝てるはずがなかったのではないのでしょうか？今後にしても、仮にTPPに参加することを想定した場合でも、小泉改革の反省点を踏まえた上で、予想される問題点は何なのでしょう？そしてその対策は？物事はすべてが良いことは皆無です。何か良いことがあれば必ず悪い点もあります。その悪い点を具体的に解決する術を持って初めて是非の議論が出来るはずですが。

消費税にしても国民の収入が伸びない中で税収を増やすのなら政府支出も同じくらい低減しなくてはならないはずですが。ところが国家は収入を増やすことは真剣に考えても、何故か支出を減らすことにはあまり真剣ではありません。あらゆる面で社会環境が180度変わりつつあるのですからこれまでの延長線から180度の方向転換が無くてはならないのは当然の理です。国家経済として成長することを前提に考えられてきた仕組みは全体が縮小する時代に入ったのですから、国家として成長が期待出来なくても成立する仕組みに抜本的に方向転換するべきです。ニーズの衰退する分野の費用を思い切って削減あるいは節約しなければ新しい分野に必要な投資を行なえるはずがありません。従って、本来は成長しなくなった国民の収入に合わせて政府支出を削るのが先決であるのは自明の理です。もっとはっきり言えば、成長を夢見る時代から、現実を直視して我慢が要請される時代に突入したのです。

成長が可能なことを前提にすれば実際に成長しなかったときのリスクが増えるだけです。現にこのためにこの20年間でリスクが積み上がってきたのですから。このリスクを本気で回避する気があるなら、成長を前提にしないで物事を組み立てた上で、運よく成長できたときに初めてその還元を国民に行う約束をするのが本当なのではないでしょうか？

か？そうでない限り、リスクは増える一方であるのが現実であることに皆が真剣に目を向けるべきです。

高齢化社会を迎えて福祉が増大するから消費税を上げるといいます。しかし、老人福祉費用といえども本当に無駄が無いのでしょうか？命にかかわるからというだけで野放図に放置すれば無限大に膨れ上がるはずで。高齢者にとり人工的な延命のため高額な医療に弄ばれことが本当に幸せなののでしょうか？むしろ過度な医療に頼ることなく自然に終える工夫をすることの方が大切なのではないのでしょうか？未来ある若い人が四苦八苦しているのなら先の見えた余裕ある高齢者を犠牲にしても救うのも止むを得ない倫理といえましょう。労働人口構成が急速に逆転する中で高齢者だけが無条件に特別待遇される理由はないはずで。医療費にコストをかけることだけが果たして本当の福祉なののでしょうか？本当の福祉を確保するためには、検査漬け、薬漬け、手術付けからむしろ脱却して医療費を削減する知恵を本気で絞ることにあるのではないのでしょうか？

あるいは、また、社会が要求する人材に対してマッチしていない、供給過剰気味の大学教育に費用をかけ続けるのは社会として本当に得策なののでしょうか？新設認可基準の見直しどころかニーズにマッチしない大学を減らすべきでしょう。大学教育の大衆化から転換して、費用の低減と同時に質の向上を図るべきです。能力があっても貧困のため大学進学選択できない人たちを救うことを優先すべきです。大学教育が貧富の差の世襲を助長するようなものでは決してあってはならないでしょう。昔の教育は物心ともに豊かになるためにありました。現在の教育はひよっとするとわざわざ費用をかけて心の貧困を助長しているのかも知れません。高学歴者といえども貧困をかかえる現在に至っては、一体何のための高学歴なののでしょうか？物やお金よりもむしろ心の満足が得られる教育が求められているのではないのでしょうか？晩婚化、独身世帯や母子家庭や父子家庭の増加を踏まえて、本当の豊かさとは何かを改めて教える教育に立ち戻る必要があります。

実際に働いている人の最低賃金が年金や生活保護世帯などの働かない人たちの犠牲になることは何としても避けなくてはなりません。高齢者や病人といえどもその能力の範囲内で働ける環境が必要です。病院通いや薬漬けあるいは病人であることを奨励しているような現在の健康保険や生活保護制度は病院に頼らずにそれなりに働いたほうがかえって暮らし向きが良くなる仕組みが必要なのではないのでしょうか？年金にしても健康であっても働かないほうが現役の人たちより余裕があるようなレベルであって良いはずはないでしょう。あくまでも本当に身動き取れなくなったときにだけ保証されるような真の福祉で無い限り、無駄は排除不可能で長続きするはずはないでしょう。健康でも遊んで暮らせる老後が若い人たちの犠牲の上に成り立つことがあってはなりません。

限界を超えた細分化、専門化

ところで、話は変わって現代社会、これを動かす組織は、人間が采配する以上、その采配する人間の統合性と自律性に大きく左右されることとなります。しかし、高度化し細

分化され複雑化した現在社会では、プロといえども、その能力を発揮できる分野は限られています。従って、専門毎に役割を分担することになっています。では、その専門家を統合する立場にある組織の長はどうなのでしょう。陣頭指揮にたつトップの彼らにとって部分、部分は専門家に任せたとしても沢山の分野を再統合化した総合的、全体的な思考、判断が一番大事になります。正常な一人の人間として常に統合的に考え、判断することが必要です。正常さを常に保つためには、一見尤もらしくても統合的に考えれば不合理、不適切な場合がないように、目配り気配りして組織をコントロールしなくてはなりません。

このコントロールが出来ない限り、いつのまにか部分的な論理が全体的な論理に優先してしまいます。国の原子力政策や東京電力などの歩んできた道はまさにその良い例です。組織が統合失調症に陥っている原因は、専門化に頼らざるを得ない組織運営が正常な人間なら本来もつ当たり前の自律神経や統合化機能をいわば社会的に失わせている点にあるのではないのでしょうか？

組織には必ずしも経験を通じて組織に必要な様々なことをすべて「考えて」、「学び取っている」人たちがばかりで構成されるとは限りません。少なくともどこか一部には、どうしても、自分自身で考えたり、判断することなく、盲目的にあるいはうっかり専門家に任せてしまい勝ちになるところが出てきます。これが気付かないうちに大事なことが簡単に抜けてしまう怖さを抱え込んだ現代社会の落とし穴なのです。こうして現代日本社会を構成する国をはじめとする官公庁や企業などの組織はその部分、部分を取ってみたらまともに機能していたとしても、全体としての自律的な統合機能に欠けるため、大きな損害をもたらすことがあり得るのです。そして万一の場合その責任は原因が個人の故意にでも無い限り、不作為があった位では個人の責任を問われることは殆どありません。この点は一見不合理のように見えますが良く冷静に考えて見ると、精神の病を抱えた個人にその責任を問えないのと同様に、むしろその原因は依存してはならない社会や組織自体に人が無意識に依存してしまっている構造自体にあるのかも知れません。

例えば、東京電力の福島第一原発では、津波の危険性は予測されていたのにもかかわらず、その対策が疎かになっていたことが露見しました。この事故は人災である旨を表明した国会の事故調査委員会の報告書も出されましたが、事故が起きてしまったからその不備、不作為を指摘し、非難することは簡単です。では、もし、自分がその備えをすべき立場の長であったとして、私だったら事前に備えが出来たはずだと胸を張って答えられる人がどれだけいるでしょう。設備にどれだけのコストをかければ安全といえるのかは、そもそも経済性と安全性の相反するバランスをどう判断（想定）して決断するか次第で大きく変わります。その立場を自分に置き換えて冷静に考えてみると、仮にそれは理想として唱えることは出来たとしても、それを当事者として決断して実際に実行することは云われるほど簡単なことではないのではないのでしょうか？

また、今回の大震災のように一定の条件下（想定内）において想定外が起きてしまったときの事後措置においても、事後にその対応のまずさを非難することは誰でもできるで

しょう。しかし、この場合にも、いざ自分がその対応にあたるべき長の立場にあったとして、私だったら備えが出来たはずと胸を張って答えられる人もどれだけいるでしょう。仮に、それなりの手順の整備、訓練などが出来ていたとしても、機械ならいざしらず、人を動かすのは機械通りにはいきません。まして、いざ不意を襲う本番では現実的に予定外のことが頻発し、その状況の把握すら困難で、計画通り、訓練通りには行かなくてもおそらくは当然でありましょう。そもそも、予想通りの非常時なのというものには存在せず、実際の非常時に対応する組織というものは、理屈や意図通りに機能するはずがないのが当然の現実といえましょう。ましてや、組織の長は同じ人が継続するとは限らず必ず入れ替わりがあります。このように、人が非常時に問題なく組織を動かすことは云われるほど簡単なことではないのではないのでしょうか？

当事者としてはコントロールしているつもりでも客観的にはコントロール不能状態にある部分があるのが避けられないのです。これが社会を人に譬えていわば統合失調症に陥っていると言わせる理由です。部分的な最適が全体的な最適を凌駕させてしまうまでのさばらせてしまった結果、社会の構成員たる個々人はその安全性を自分たち自らの手で脅かしている面があるのが現実であるという点に目を覚まさなくてはなりません。だからといって、個人としては、東日本大震災や福島原発事故などのように、被害が現実のものとなってから国や組織の責任にしても後の祭りです。組織とは平時には当てにできたとしても有事の際にはあてにできない、あるいはあてにしたとしても無理があるのが当然の現実であることを認識するべきです。

見せ掛けのグローバル化

一方、直近の現代社会はその支える技術が高度化してきたことに加えて、世界のグローバル化により社会規範が普遍化してきています。このような状況下では、本来は組織や従来の不文律たるものも単純化されて大規模化、多様化が進んで然るべきところですが、ところが現実はどうでしょうか？日本も世界の流れに沿ってルールや仕組みはグローバル化してきましたが、過去との連続性を重んずるあまり、組織や不文律は単純化されるどころか、日本ではかえってますます複雑化する中で大規模化、多様化が進んでいるのかも知れません。このまま中小が呑み込まれて大規模化、集中化がどんどん進んだ挙句に、機能不全が生じた時には社会自体が立ち往生してしまい兼ねません。大は小を兼ねることはできても小が大を兼ねることは出来ません。後戻りはひょっとしたら不可能なのかも知れません。日本では高度な技術を生み出して多様化を実現してきた一方で、その運用や利用を行う組織やルールを単純化できずにかえって複雑化しているのかも知れません。

オリンパスの巨額粉飾といい、ごく最近の証券業界の常態化していたインサイダー取引といい、運用面では相変わらずローカルなままで一向にグローバルスタンダードにはなっていない実態が明らかになっています。これを譬えれば、仏（法律）はグローバルに彫り直したかも知れませんが、彫り直した仏に入れる魂（運用）を入れ替える努力を怠って

きたのです。現在の日本全体を漂う閉塞感のひとつには、ルールはグローバル化したものの、一番大事な人の心の転換、心構えの育成を放置したまま、ただ、単なる人減らしのリストラに終始してきたことに起因しているのではないのでしょうか。人材の魂や精神は、従来どおりローカルのまま放置されてきたが故に、全くと云っていいほど日本の人材はグローバル化に対応した「普遍化」や「多様化」が出来ていません。相変わらず続く枚挙にいとまない内向きの組織不祥事はその証拠といえましょう。つまり第二の開国といいながら実は鎖国同然の文化が残っているのです。

このように、社会自体が構造的な病にかかっているのだとすればその原因を取り除く努力をしない限りいつまでも繰り返されることとなります。では、その処方箋はどこにあるのでしょうか。「技術」や「組織」を避けては通れないのが現代の高度技術社会である以上、一人ひとりの個人は、組織の責任を負わされるリスクと同時に、組織から被害に合わされるリスクも両方ともに抱えているのです。社会も組織も人が動かす以上、その構成員たる個人は総合的なバランスを正常にコントロールできる状態にこれらを常に置いておく必要があります。

II. 正常軌道復帰への処方箋

相対的に退化している個人の社会適応力

世間ではいわゆる事務屋とか技術屋という分けがあります。良く言えば、お互い棲み分けして余計なエネルギーは使わない。悪く言うと、自分の専門外のことはその道の専門家に任せて自分の専門外のことには関知しなくなりがちです。しかし、本来は、高度に専門化した社会であればあるほど、全体としての統合性を保つにはお互いのブラックボックス化を避けることが必要です。部分最適の論理は本来的に常に統合的な最適論理に沿う場合にのみにしか通用しないはずで、相互のブラックボックス化は気がつかないうちにいずれ部分最適の論理が統合的な最適論理を凌駕してしまう可能性を生み出します。

これを防ぐには専門相互間の距離を遠くしないことが重要となります。ですから、自分の専門外のことでも興味を持ちあくまでも人間としての統合的、常識的な論理で吟味する習慣を持つことが大切です。事務屋といえども技術マターを常識として理解し、技術屋でも事務的マターを常識として理解すべきです。そうすることで、自分の専門外のことでも現実の経験を通じて常に、「考えて」、「学んで」いくことができます。

そういう努力を怠ったまま、事が起こるとすぐに、他人や国などの組織や制度のせいにしてしまうのでは、問題は永久に繰り返され悪化の一途をたどるといわざるを得ません。どんなことでも常に常識的な判断ができる真に賢い個人が一人でも増えることによって、社会の落とし穴に気付いて対処出来る人が相対的に増えます。そうなればこそ、必要な機能が漏れなく正常に果たせるだけ社会や組織を構成できるようになるのです。各個人が身近で起こる何事も決して、他人事ではなく自分自身のこととして捉え考え判断して対応していける能力を身につけることこそが重要なのです。こうして組織やマスコミ、時代の流れ

に呑み込まれない個の確立が社会として出来ることになります。現状に文句があればあるほど自分自身が文句を言われたいだけの人になることが先決です。

専門に関する学会も一般に対して中立的公平な専門的機能としてよりも業種内相互扶助的な内向きの機能が主体となって同業組合的になっています。これが専門外の批判的な意見を相互に聞くことの無い、聞くこともできない、あるいは胸襟を開いた中身のある議論が行われない閉塞的社会を作っています。東日本大震災を経験するまで地震学者や防災関係者たちが地層の歴史にはあまり目を向けていなかったというのですから本当に驚きです。業種や専門分野内での最適は考えても、国や社会全体最適を意識して考えることが殆どないことが、本当の意味で国や社会を改善できるきっかけを作ることや人材を輩出することが出来ていない遠因となっているのではないでしょうか？

自分の専門以外の分野にももっと関心をもって、いかなる組織の中にあっても自分の存在を主張できるとともに、そのほかの批判的意見にも耳を傾けられる人材が今の日本の社会に求められているのではないでしょうか？自分が関知せずに知らないあるいは不得意なことに首を突っ込まず壁を作ってしまうと、その相互に内容を批判的に他と確かめ合うことがなくなり仮に不都合があっても軌道修正する機会を失い、いずれどういう結末となるのか想像に難くありません。

技術も組織もその構成員も、昔と違って常に急速に変化していく環境に追従してゆけるダイナミックさが無くてはなりません。硬直した日本の組織にダイナミックさを吹き込むためには、やはり、組織に振り回されない人格を持ち、組織は騙したとしても自分の人格だけは裏切らないだけの自律性を備えた本当の意味での実力がある組織構成員を一人でも多く育成することがどうしても必要でしょう。平時はともかくとして、万一のときにはいやでも頼りにせざるを得ないのは個人としてのリーダーであって、結局は、組織においても、個人として正常な統合性を失わない信頼性におけるリーダーたる人格において他に無いのではないでしょうか。

問題がもし自分個人の直接的利害にかかわる個人的なことであれば、利口な人なら、専門家に任せたことでも何とか自分自身で考えたり、判断する努力をしましょう。つまり、現在の日本は社会的自律性を失って当事者意識が薄いため渦中の栗を敢えて拾わない人たちが多すぎるのが問題なのであって、これを少しでも自分自身の問題として捉えさせる必要があるのです。

自律性ある個人と思考力

では、組織や環境に依存しない自分らしい人格を保った生き方はどのようにすれば出来るのでしょうか。それには、『言いなりではない』協調性と、『自己中心的ではない』自律性とを組み合わせた『自律的協調性』が必要なのです。日本では「集団の自律性」の方がまだまだ高いことによって「個人の自律性」が低められています。

OECD はこれからの若者に対して、グローバル化しかつ科学技術が高度に発達する

これからの世界においては、変化に対処して経験から学ぶと同時に、批判的な立場で行動する能力が必要であって、個人として思慮深く考えて行動しなくてはならないと真剣に説いています。これからは、単一の雇用主のために働く生涯雇用の職業が減少し、科学技術も日進月歩で進むため、学生のときだけでなく生涯にわたる能力開発の必要性をも訴えています。

さらに、また、今日の多様でかつ複雑な世の中では、二者択一の正解を越えて、一見して矛盾していたり、両立が不可能な問題を現実的な側面から深く考えて建設的な1つの答えに纏め上げてことを学ばなくてはならないとも問っています。それには、自分が当然と考えることが必ずしも他人と共有されないことを十分に認識し、他人の思いを十分に理解することが必要であるとしています。そして自分の生涯の職業が分断されることがあっても個人の人生を意義があるように自律的に権利、利害、限界や義務を擁護、駆使しながらコントロールする能力を養うことが若いときから必要であるとも説いています。

これらの点は裏を返せば、このグローバル化の時代はこれまでのように、ただ受身の姿勢だけで与えられたことについて、ただがむしゃらに頑張るだけでは満足した人生は送れそうにもありませんよ、積極的に自分の人生と正面から向き合って考えて切り開いていかないとどうなるか分かりませんよ、とそれとなく示唆しているようなものといえましょう。

グローバルな自律性の確保（自己の確立）

グローバル化が進んでいる現在では好むと好まざるとに関わらず、日本にいる（ローカル）からといってローカルなまま（日本でしか通用しない）ではいずれ行き詰ってしまう環境を強いられています。グローバル化としばしばもじられるように、地球規模で考えながら自分の地域で活動することを強いているものがグローバル化の本質です。

ですから、日本流のままの自律性ではグローバルには既に立ち行かなくなっています。こんなことはグローバル化を行おうとした時点でよく考えれば当然予想できたはずのことではあります。グローバル化の是非は別にして、既にグローバルしてしまった現在では、世界に通用するということが重要なのであって、日本にいたとしても海外にいるのと同じ条件であるというのが最終的な現実なのです。グローバルスタンダードの個人としての「自律性」とは、人や組織、環境に依存せずすべて自分の責任として受けとめることなのです。そのためには、働く個人が自らのキャリアの開発を組織に頼らずとも自らの責任と判断で進めることが必要となります。同時に組織に頼らずともマーケットで通用する専門性と仕事への強い熱意を自分自身が備えていることも必要となります。

これらによって雇用喪失に対するリスク対策ができることになり個人は初めて組織と対等の立場になることが可能となります。必要に応じて組織環境改善を求めた意思表示ができ、その結果次第では組織から離れる動きが可能となるのです。具体的には、1)「異なる『価値観』を理解できる」、2)「明確な『意見』、『意思』を持っている」、3)「他人

から尊敬・尊重されるに足る個人としての価値観を持っている」ことが必要となりましょう。

つまり、多様なルールの下で多様性をマネジメントするには事実に基づいた客観的な意見をしっかり主張できなくてはなりません。多様性を受け入れることは表面的な理解ある態度を示すことでは決してなく、立場の異なる人たちがしっかりと主張し合うことでお互いを理解し合っていくこととなります。

グローバル化した現代で、世界に通用する（日本にいたとしても海外にいるのと同じ条件であるというのがグローバル化の現実なのです）信頼に足る人になるためには、「どんな場面においても云うことに首尾一貫した一貫性（自己同一性）」が極めて重要となります。グローバルなスタンダードでは云うことに一貫性がないと信用の獲得は難しいですし、世界の理解を得るには普遍化した論理に基づかなくてはなりません。また、論理だけが辻褃があっても今度は（グローバルな）感性のない論理もまた世界には理解されにくいこととなります。伝播力では感性のほうが圧倒的に力を持っていますから国際的な感性を養うことも論理力以上に重要となってくるのです。

I T技術の威力

これまでに述べたことはまるでスーパーマンでもなければ出来ないように思われますが、決してそのようなことはありません。道具や環境が我々既に現役を卒業した世代の時代とは様変わりしているのです。昔は、知識がある、知っているというだけで得をする場面が多くありました。知るということがそれだけ今に比べて相対的に大変でしたがそれだけの価値があったのです。今では、知らないことを調べて知ることはインターネットを駆使すれば遥かに簡単で、容易にかつタイミングよく可能になっています。逆を言えば、知っているというだけではあまり価値がない時代になっているのです。同じ知識でもその真偽の吟味や利用の仕方次第でその価値が大きく変わる時代なのです。知らないことでも必要となった時点でいつでも知ることが出来るのです。

我々が現役の頃は、情報を知るだけでなく、手書きにのみ頼る書類の作成やそろばん程度で計算に要する労力たるや、今では考えられないほどの労力を要していました。昔の作家の原稿を見ると、原稿用紙で推敲を重ねた様子が見て取れますが、これは素人にはとても真似が出来ません。一度や二度書き換えた位でまともな文章が出来るようになるためには相当、頭の中の整理が行き届いていないと不可能でしょう。

今ではワープロを利用すれば、思いつくままに、打ち込んで何回でも修正して書き換えることが簡単に出来ます。これは手書きでは普通の人には殆ど不可能です。計算にしても、昔は縦横の集計チェックのために何回もそろばんを入れなくてはなりません。しかし、今ではエクセルを使えば入力と同時に一瞬にして計算ができます。ということは考えながら計算することもできます。考えながら作業が出来るということは『考える』訓練が作業しながら自然に出来るということです。昔は、作業しているときは思考が停止し、

思考しているときは作業が停止していたようなものです。これらはコンピュータが無かった一昔前と比べればスーパーマン並みの大きな違いです。

言い換えると、コンピュータやインターネットを駆使することで簡単に好きなだけ試行錯誤が出来るのです。つまり、アイデアさえあればバーチャルな経験がいくらでも積めて賢くなれるということを意味します。これからの時代、このIT技術を駆使する人と駆使しない人の判断力や実行力の差はまさに天文学的になるでしょう。

グロービッシュの薦め

さて、今や英語はクイーンズイングリッシュの時代ではありません。グロービッシュ¹（グローバルとイングリッシュのもじり。）の時代だといわれています。今、中国では、カタコトのブローケンで恥ずかしげも無く平気で英語を話す人がどんどん増えているそうです。下手くそでも喋る英語と、多少それより上手でも喋らない英語を比べれば喋る方が実際に役に立つのは当然です。

中国語が出来なくても英語さえ話せば中国人とコミュニケーションできるチャンスが増えるのです。韓国であれ、ロシア、東南アジア、南米であれどこの外国人であっても英語さえ話してくれれば同じことが云えます。中国人の1割が話すようになったとしても日本人の全人口以上なります。これは実質的に英語が世界でデファクトスタンダードになりつつあるということと同じです。ニッサンとか楽天とかユニクロは遅ればせながら社内会議を英語にしているようですが、世界の流れはもっともっと速い上に、トップからの流れではなく裾野の広い庶民の方からの動きとなっています。

下手くそでもコミュニケーションを取ろうとする国民と下手くそだからコミュニケーションを嫌がる国民との差は開くばかりでしょう。外交の舞台ではなく庶民の人たちが異邦人とコミュニケーションを取ろうとする、これが本当のクリーバリゼーションのメリットといえるでしょう。何時まで経っても話そうとしないリスクの方が下手でも話そうとした時のリスクよりもはるかに高いのは明らかです。中学程度の英語を耳から覚えて話して積極的にコミュニケーションすることに軸足を置く、使える教育への転換が必至であるといえます。それには何よりも、短期留学させてでもコミュニケーションができて視野を広げることの出来るグローバルな文化を肌で感じることで出来る日本人英語教師を一人でも増やすことがまずは先決でしょう。

翻訳にしても昔は辞書を手で引く面倒がありました。今ではオンライン辞書を引けばワンタッチで引けるので全く面倒がありません。外国語のウェブサイトにしても自動的に翻訳されます。今では自動翻訳も内容によってはこれで十分です。つまり、知りたければ、外国のデータでも、知って理解することは昔に比べれば桁違いに簡単になっているのです。このように、高度化した科学技術や広域化したグローバル化であらゆる意味の環境が厳しくなっている一方では、正常な人としての能力をフルに発揮しようという気さえ

¹ “Globish” Newsweek, 12 June, 2010

あれば、その知恵を絞るための手立ては十分に整っているのです。

人生をエンジニアリングする時代

これまで私たちの世代は考える間もなく生きるため食べるために懸命に生きてきました。しかしこれからは生きる意義を考えて探さなくてはならない時代を迎えたのです。福島第一原発事故にしても、国や東電を始めとした当事者や未曾有の被害を蒙った被災者もさることながら、当事者たる東電のエリート社員個人個人のひと達にとってもまさに青天の霹靂でありましょう。大多数の社員個人は、被災者同様、特に不真面目な取り組みをしていたわけでもなく真摯に働いていたのです。それなのに、ある日突然、全員の人生がまるごと一夜にして暗転してしまったのです。

想定外の事態を個人の立場で見れば、個人にとって未知の様々な問題（想定外）との遭遇が必ず誰にでもあると云えます。しかし、想定外の事態といったものは、程度の違いはあっても、この浮世ではどの個人であっても、公けのみならずそして私的にも起こり得るのです。むしろ、個人としては好むと好まざるに関係なく、恵まれたくはない様々な場面に遭遇することの方が公私ともに多いのが現実ではないでしょうか。特に、ごく当たり前のことが当たり前でない現実も多いことを踏まえたうえで、個人はその人生においてもどうあるべきなのでしょう？

この現実の未知との遭遇において個人の選択は3通りしかありません。すなわち、1) 未知の問題に前向きに取り組み解決をはかる、2) 未知の問題に見て見ぬふりを決め込み現状に甘んじてひたすら過ぎ去るのを待つ、3) この問題を抱えた現状から思い切って転進する、の3通りです。人は多少つらくても現状維持が一番楽なのかも知れません。しかし、本当は1) の自分で自ら環境を変えるとか、万一それが不可能とみれば、3) の思い切って現状環境を捨てて新たな環境を求めて転身することが出来るなら、それに越したことは無いのではないのでしょうか？

社会的にもこのような人たちが増えてこそ閉塞感を打破できるのではないのでしょうか？現在の日本の抱える閉塞感はこの1) や3) の人たちがあまりにも少なすぎるところから来ているものなのではないのでしょうか？また、個人的にも未知や苦境を乗り越えてこそ本当の人生の醍醐味が生まれてきましょう。では、それが出来る人と出来ない人との差は一体何なのでしょう？

たとえ、自分の専門でない、知らない、あるいは不得意な場面でも、もし、必要な場合には、自分自身の力を信じて、考え抜いて、自らの力で切り抜けることが出来れば、少なくとも自分の運命を他人任せにすることだけは避けられます。公私を問わず自分が何らかの問題に遭遇すれば必ず前向きに解決するべく、最善の最新の知識を仕入れます。それをもとに分析して判断し対策を実行して解決を図ります。必要に応じて親しい友人の力を借りることはあっても必ず最後は自分が判断します。

それには常に、ごまかしや隠ぺいを排して事実を求めること、そして、事実やデ

一タをよく自ら分析して、他人に頼ることがあっても最後の判断は自分自身で考え抜くことが欠かせません。知識は手元に無くても必要に応じて集めれば良いのです。このインターネット社会と情報開示を求められる社会では情報は昔とは大違いで比較的手軽に検索できます。その加工、分析も昔に比べれば遥かに容易です。しかし、蒐集だけではごみに過ぎませんし、それらの真偽を分析して考える力が無くてはどうにもならないのです。一昔前の手書きや手計算の時代と異なってコンピュータを使いこなせば思考の試行錯誤を極めて容易にできるのです。本当のありのままの事実やデータに基づいて論理的な思考を繰り返すことで、知識偏重でなく思考力と実行力に重点をおいた経験を積むことが出来ます。そうすれば自ずとその思考力は養われて行くのは請け合いです。

あとがき

小生の人生を今から振り返って見ると、何故か学生当時から「自律的な個人としていかにして自己の成長を図る」かに腐心してきたように思います。仕事や上司には必ずしも恵まれなかったし、出世もしませんでした。苦境時の判断を一步間違えばどうなっていたか分からない場面も公私ともに多々ありました。しかし、常に思い切り楽しく充実していましたし10年前に現役を退いてからも充実しています。自律した個人としての幅広い視野と経験と知識のおかげだと思っています。

これからのグローバル化した高度技術社会を個人として充実した人生を送るには、やはり会社や仕事に依存しない自律的な個人としていかにして自己の成長を図るかにかかっているといえます。自分らしきとは自分の教養と格闘することにより初めて見えてくるものです。従って、人生とは知的好奇心の涵養で自己発見の旅でもあります。

そのためには自己の人生全体をエンジニアリング工程として考えて、大学に進学しそして卒業して就職する20歳前後に始まって、30歳台、40歳台、50歳台、60歳台と10年毎に目標となるマイルストーンを具体的にイメージする必要があると思います。

- ・30歳台にのるまでは何か1つ自分の得意な分野をつくります。資格などを取ります。
- ・30歳台から40歳台にかけては得意な分野の視野を少しずつ広げて経営的な知見も獲得します。
- ・40歳台から50歳台にかけては自分の得意な分野以外にも必要に応じて視野を広げます。こうしてプライベートな面からの自己の成長の目標管理を意識的に行ってPDCA(Plan, Do, Check and Action)を実践していくこととなります。

いずれにしても、努力を重ねないで自律的な個人が出来上がる訳はありません。ということは人生に限りがあるとすれば、出来るだけ若いうちにこの自律した個人の領域に達する方が良いに決まっています。そこに、必死に努力しないと卒業出来ない大学なるものが遅ればせながらやっと日本にも登場しました。秋田市郊外に2004年4月に開学した国際教養大学²なるものがそれです。例えば、この大学授業はすべて英語で行い在学中に1年間の

² 「なぜ、国際教養大学で人材は育つか」 中嶋嶺雄著、祥伝社黄金文庫

海外留学が義務化されています。卒業資格のレベルに達するには相当厳しいハードルが課せられていて、4年間で卒業できる学生のほうが少ないといえます。

日本の教育は世界標準から完全に外れてしまっていて「知の鎖国」としか言いようのない高等教育が続けられているといえます。知的土台が無ければ高度な専門性は身につけません。世界で活躍しようと思ったら、どのような分野であってもいまや学位(PhD.)を持っているのが当たり前でそうでないと国際社会では通用しないといえます。日本はありとあらゆる分野の国際会議に多くの専門家が参加しますが、いざ議論となったときに発言する人は殆どいません。中学、高校で6年間、さらに大学で4年間、英語を学んでも英語で仕事の出来る人(TOEFLで600点以上)は大学卒業生の1%にも満たないのです。その点、国際教養大学の学生はその多くがTOEIC900点を越えるそうです。

現在はコンピュータを使いこなすがいやでも必須になっているのと同様に、英語も使いこなすことが必須になっているのです。しかし、英語やコンピュータや自己の専門分野はあくまでも目的を達成するためのツールに過ぎません。ここでいう目的とは奥の深い専門性をベースにした専門以外の幅広い視野と経験を以ってこれからのグローバル化した高度技術社会を自律した個人として有意義な人生を過ごして行くことにあると考える次第です。

(完)